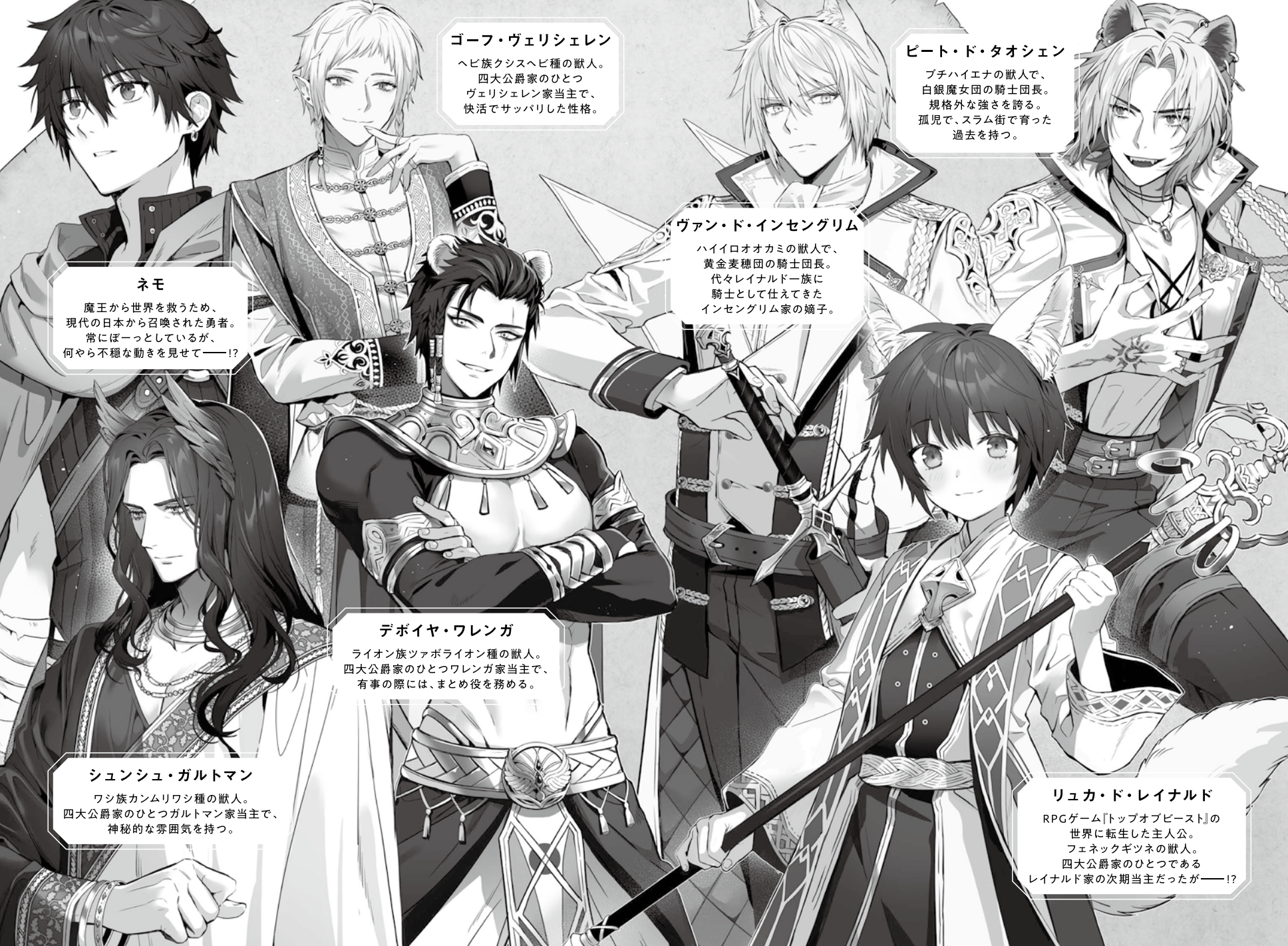


モブモブ異世界のモブ当主になったら
側近騎士からの愛がすごい



ゴーフ・ヴェリシレン

ヘビ族クシスヘビ種の獣人。
四大公爵家のひとつ
ヴェリシレン家当主で、
快活でサッパリした性格。

ビート・ド・タオシェン

ブチハイエナの獣人で、
白銀魔女団の騎士団長。
規格外な強さを誇る。
孤児で、スラム街で育った
過去を持つ。

ネモ

魔王から世界を救うため、
現代の日本から召喚された勇者。
常にぼーっとしているが、
何やら不穏な動きを見せて——!?

ヴァン・ド・インセングリム

ハイロオオカミの獣人で、
黄金麦穂団の騎士団長。
代々レイナルド一族に
騎士として仕えてきた
インセングリム家の嫡子。

デボイヤ・ワレンガ

ライオン族ツァボライオン種の獣人。
四大公爵家のひとつワレンガ家当主で、
有事の際には、まとめ役を務める。

シュンシュ・ガルトマン

ワシ族カムリワシ種の獣人。
四大公爵家のひとつガルトマン家当主で、
神秘的な雰囲気を持つ。

リュカ・ド・レイナルド

RPGゲーム『トップオブビースト』の
世界に転生した主人公。
フェネックギツネの獣人。
四大公爵家のひとつである
レイナルド家の次期当主だったが——!?

目次

モブモブ異世界のモブ当主になったら
側近騎士からの愛がすごい

7

ハイエナの子とスラムの太陽

277

オオカミの子とちいさな手のひら

293

モブモブ異世界のモブ当主になったら
側近騎士からの愛がすごい

第一章 次期当主サマはフェネックギツネ

「おお、なんと可愛い子だ！」

浅草^{あさくさ}琉夏^{るか}の新しい人生の幕開けは、そんな称賛で始まった。

「大きくてつづらな瞳、見ていると虜^{とり}になりそうですわ」

「これは将来、尤物^{ゆうぶつ}になりますぞ」

琉夏は声の主が誰かを見ようとして瞳を動かすも、視界がぼんやりしている。頭を上げようとしたが重くて動かせず、それどころか全身にうまく力も入らない。

（なんだこれ？ 体がおかしいぞ）

助けを求めようとして開いた口からは、なんと弱々しい泣き声が漏れた。そこでようやく琉夏は気づく。自分が赤ん坊だということに。

（赤ちゃん!? 俺、赤ちゃんになってる!?）

完全にパニックに陥った琉夏は、なんとか体を起こして言葉を発しようとするが、手足はわずかに動くものの、口から大きな泣き声が出ただけだった。

「おお、おお。小柄だが元気いっぱいだ。素晴らしい、さすがはレイナルド家の次期当主だ」

どうやら周囲に幾人もの人がいて、自分を褒め称えてくれていることはわかるのだが、それが誰で、ここがどこなのかはさっぱりわからない。

（あの、ここはどこですか？ なんで俺は赤ちゃんになってるんですか!?）

「見て、小さなお手々に小さな足。どこもかしこも本当に小さいわ。ほら、おちんちんも。うふふ、可愛いったらありやしない」

「はっはっは。いやいや、今はこんなに小さくとも将来はわかりませんぞ。数々の美女を喜ばせる剛のモノになるやもしれません」

（やめて！ エッチ！ そんなと注目しないで!!）

当然誰も琉夏の泣き声の意味など理解できず、目尻を下げたホクホクとした笑顔で彼を観察しては、好き勝手に談笑するばかりだ。

（赤ちゃんって無力すぎない？ 誰も俺の質問に答えてくれないうえ、恥ずかしいところを見られても抵抗できないなんて……俺の人権はどこ?）

人生の開幕早々、琉夏は心が折れそうになる。その瞬間、ふと記憶が呼び起こされた。

（——そうだ、俺……）

琉夏は高校への登校途中、トラックに撥^はねられたことを思い出す。衝撃は一瞬で、痛みを覚える前に視界が真っ暗になった。

それが自分の“死”だったのだと、ようやく琉夏は理解する。

（嘘でしょ……十六歳で死んじゃうなんて！ まだやりたいこといっぱいあったのに！ 友達だつてできてないのに！）

ブワツと悲しみが込み上げてきたものの涙はとつくに溢れ出して、赤ん坊の泣き声を一段と大きくしただけだった。

しかし、泣いても喚いても時間が巻き戻るわけもなく、周囲は、やれ泣き声が立派だとか、やれ泣き顔が可愛らしいだとか言つて褒め称えるばかりだ。そうして琉夏はやがて泣き疲れて、眠りに落ちるしかなかった。

あれから十年の月日が経った。

生まれた当初は赤子の無力さと十六歳で死んだ前世の自分に悲嘆するばかりだった琉夏も、今ではすっかり今世に馴染み人生を謳歌^{おうか}している。

今世で彼に与えられた名前は“リュカ・ド・レイナルド”。なんとレイナルド公爵家という大貴族の跡取りだ。

この世界は共和政でもなければ王政でもなく、代わりに四大公爵家と呼ばれる四つの公爵家が大陸を支配している。レイナルド家はそのうちのひとつにあたるらしい。

つまり、リュカは超がつくほどの名門貴族のお坊ちゃんだ。

前世では平民だったリュカは成長することに何となく自分の立場を理解し、次期公爵家当主という責任の大きさに慄^{おそ}きながらも、公子生活をガツツリ満喫している。

毎日仕立てのいい服を侍女の手で着せてもらい、贅^{ぜいたく}沢な食事や宝石のようなスイーツは食べ放題、夜は雲のようにフカフカで広いベッドで眠った。欲しいものは要求する前に与えられ、退屈しのにと催されるのは、美しい踊り子の舞や湖での船遊びなど贅を尽くした風流なものだ。これで人生に文句など言ったらバチがあたつて、来世はダンゴムシに違いない。

ただし、この世界にはテレビやスマホといった文明の利器はなかった。生活様式は中世のヨーロッパに近い感じだ。

いや、ファンタジーの世界というのが正しいだろう。年齢が上がるにつれてこの世界の実態を理解してきたリュカは、ある日気がついたのだ。

ここが『トップオブビースト』の世界であることに。

『トップオブビースト』は、前世の日本で人気だったゲームだ。中世ヨーロッパ風の世界を舞台にしたRPGで、プレイヤーである勇者は四大公爵家が支配する大陸を冒険する。

システム自体は至って平凡だが、タイトル通りの獣人要素が一部のファンの心をガツツリ掴んだ。多種多様で見目麗しい獣人たちのデザインが、世のケモナーたちを魅了したのだ。

もちろん、リュカも獣人である。生まれて数ヶ月後に目が見えるようになって周囲の人間にケモ耳が生えているのを認知したときも驚愕だったが、自分にも立派なケモ耳と尻尾があることに気づ

いたときには叫んでしまったほど驚いた。もともと、今ではすっかり慣れて自分の尻尾に愛着さえるがある。

そんなモフモフだらけのRPG『トップオブビースト』を、リュカは前世でクリアまでしつかりとプレイしていた。そのため自分の父がゲーム機の画面で見たイケメンキツネ獣人だと気づいたときは頭が混乱したが、それがこの世界が『トップオブビースト』だと気づいたきっかけでもあった。そのときは焦った。というのも、数年後に魔王が闇の世界から出現し、大陸を恐怖のどん底へ陥れることを知っていたからだ。よりによって転生先が魔王の存在する世界だなんて！ とリュカは一瞬嘆いたが、よくよく考えれば悲嘆することはなかった。

なぜなら、魔王出現の数年後には四大公爵家——百獣の王ライオン族のワレンガ家、空を司る王者ワシ族のガルトマン家、先祖に龍を持つヘビ族のヴェリシエレン家、そして圧倒的魔力を持つキツネ族のレイナルド家が異世界から勇者を召喚し、勇者は旅の果てに無事に魔王を討伐するからだ。

いつときは森や山に魔物が出現するようになるものの、レイナルド家に大きな被害はなく、ましてやリュカは、ゲームにはほぼ背景としてしか登場していない。勇者召喚などゲームに関わるのは、現当主である父グレゴール・ド・レイナルドだ。

つまり、リュカ自身には何も起こらない。このゲームに於いてリュカは完全なモブなのである。多少の騒動はあるかもしれないが、特に生活が変わることも悲嘆することもないと考えたリュ

カは、安心して公子生活を満喫することにしたのだった。

ちなみに、キツネ族であるレイナルド一族には、様々な種類のキツネの獣人が存在する。獣人は種を超えた交配ができるようで、キツネ族も同族別種の血が交じり合っており、生まれる種類はキツネならなんでもありらしい。最も多いのは前世でもよく見たポピュラーなアカギツネだが、リュカはなかなか珍しいフェネックギツネの獣人として生まれた。母方の先祖にフェネックギツネがいたらしいので、その先祖返りだろうと言われている。

フェネックギツネの特徴は大きな耳とつぶらな瞳、そして小さな体だ。獣人の特徴も同じで子供のように愛らしい顔立ちが多く、男女問わず小柄である。それは年をとっても変わらないように、見た目は成長が止まったかのごとく幼いのがフェネック獣人の最大の特徴だ。

リュカも例外ではない。大きくてつぶらな瞳はキュートで見る者の胸をときめかせ、永遠の少年のような丸顔は、大きな耳も相まってたまらない愛らしさと庇護欲を掻き立てる。まだ十歳なので身長はもう少し伸びそうだが、おそらく平均的な大きさにはならないだろう。

誰からも愛される容姿というのは恵まれていると思うものの、見た目が永遠に少年なのはどうかとリュカは少し悩ましい。男らしさや威厳に欠ける気がする。

そんな贅沢な悩みを抱えられるほど、今となってはもうこの世界が『トップオブビースト』だと思えない。

自分が生きている以上、ここはゲームではなく現実の世界だ。日々を楽しみながら優しい父と母

に存分に甘え、人生を楽しんでいる。

時々には前世の家族のことを思い出して切なくなることもあったけれど、十年の月日と幸福な毎日が、浅草琉夏の死と新しい人生をゆつくりと受け入れさせてくれた。

（前世で早死にしちゃったぶん、今世では長生きして琉夏ができなかったことを叶えるんだ。大丈夫、きつと今度こそ叶う。今度こそ——友達を作ってみせる！）

新たな人生を生きるリュカが秘めた決意を胸に過ごしていた、そんなある日のことだった。

「この子がヴァン・ド・インセングリムよ。仲良くなさいね」

母に紹介されて部屋にやってきたのは、尖った耳と大きな銀色の尻尾、それに眼光鋭い金色の瞳を持った男の子だった。

シャツにネッククロスを巻き脚衣と揃いのベストを着た姿は、リュカと年齢が半年しか変わらないと聞いていたのにとでもシャンとして見えた。腰から下げた装飾付きの剣が余計に彼を大人っぽく見せているのかもしれない。

オオカミ族インセングリム家は、代々レイナルド一族に騎士として仕えてきた歴史がある。オオカミだけあって戦闘能力はずば抜けており、素早い身のこなしと鋭い剣技、優れた状況判断と統率力は騎士にうってつけだ。

レイナルド家では、当主になると直属の護衛騎士団をふたつ持つ習わしがある。インセングリム

家の嫡子であるこの子は、どうやら将来のリュカの護衛騎士団長候補らしい。

年が近いということで、今は遊び相手兼護衛見習いとしてリュカのそばに置くことになったと母が説明した。

「インセングリム家長男、ヴァンです。どうぞヴァンとお呼びください」

ヴァンは胸と腰に手をあて、年齢に似つかわしくないほど畏まった礼をした。インセングリム家は厳格だと聞いたことがあったが、彼はまさに体現している。

「あの、えっと。リュカだよ。よろしくね。俺のこともリュカと呼んでいいよ」

ヴァンに比べなんともしまりのない挨拶をしながら、リュカはぎこちなく微笑む。

「ヴァンに屋敷を案内してあげるといいわ。仲良くね」

そう言う母は、部屋にふたりだけを残して出ていってしまった。

リュカは頬を紅潮させソワソワと落ち着かない様子を見せる。リュカがヴァンを目の前にして高揚し、緊張するのにはわけがあった。

（こ、子供だ。同い年の子だ。つ、ついに友達ができるかもしれない……！）

そう、これはリュカにとって——いや、琉夏の人生と併せても初めての友達をゲットするチャンス。の到来なのだ。

浅草琉夏は十六年の人生で“友達”というものがいなかった。

生まれつき難病を抱えていた琉夏は十五歳になるまで、一年のほとんどを病院で過ごす生活をし

ていた。免疫力が低いため病院でも個室に入院していた琉夏にとって、友達と過ごす日常というのはまるでファンタジーだ。ドラマや漫画でしか知らないそれに、強い憧れを持つのも無理はない。十五歳で手術が成功してようやく学校へ通えるようになったが、生まれて初めて同世代の輪の中に入った琉夏は何をしていいのかわからなかった。

友達が欲しい、ずっと憧れていた友達と楽しい日常を送る経験がしたい。そんな思いから行事のたびに進んで実行委員を担ったり部活に入ってマネージャーを務めたりしたが、無理がたたってすぐに体調を崩し、ますます仲間の輪に入りづらくなってしまった。

(……俺は何もできないんだ。友達も作れないし、クラスや部活の役に立つこともできない。誰の力にもなれないし、誰も俺のことなんて好きになってくれない)

友達が欲しいという渴望と、それが叶わない無力感。人に囲まれているのに感じる孤独は十五歳の琉夏を苛んだ。

そして高校二年生に進級した春。それでもめげずに友達を作ろうと張り切っていた琉夏は、登校途中で暴走トラックに撥ねられて短い人生を終えた。

あまりにも未練だらけの人生だったと、リュカは前世を振り返る。

何も成し遂げられず、誰の役にも立てなかった。家族には世話ばかりかけ、恩返しもできていない。そして何より無念なのが、あんなに憧れた友達という存在がひとりもできなかったことだ。なんと無力で孤独な人生だったことか。

(今度こそ、絶対に友達を作る！ それで楽しい思い出をいっぱい作るんだ！)

そんな前世の雪辱を、今世では絶対に果たそうとリュカは心に決めていた。

しかし、この世界に幼稚園や学校といったものは存在しないうえ、超お坊ちゃんのリュカは容易に外へも出してもらえない。もつとも外へ出たところで周囲は警備や侍従に囲まれているし、レインالد家の子息に気軽に近づいてくる子供もないのだけれど。

この十年間でリュカは親族の子供以外と喋ったことがない。その親族でさえも時折顔を合わせるだけだし、本家嫡子のリュカに対しては堅苦しい挨拶をするくらいで談笑すら交わしたことがない有様だ。

だから今日から側近の子供が来ると母から聞かされたとき、リュカは飛び上がるほど喜んだ。遊び相手と護衛を兼ねるヴァンは、これから毎日一緒にいると言うのだ。これはもう友達になるしかない。いや、友達になる以外の選択肢などあるのか。

そうして、激しく胸を弾ませるリュカの前に現れたのが、オオカミ族の少年ヴァンだった。

「じゃ、じゃあ屋敷を案内しようか？ あつ、でも到着したばかりで疲れてるかな？ 先にお茶にする？ お腹が空いてるなら何か食べるものを用意させるよ」

リュカは興奮気味に話しかける。友達になって欲しい、彼に好かれたい、そんな気持ちが抑えきれない。

だがヴァンはニコリともしないどころか、微かに眉根を寄せて顔をしかめた。

「結構です。屋敷の見取り図を頭に入れてきましたし、食事も済ませてきました。私のことはどうぞお構いなく、リュカ様は普段通りにお過ごしください」

あまりに懇勤^{いんぎん}な彼の態度にリュカの笑みは引っ込んで、代わりにポカンとした表情を浮かべてしまふ。

「そ……そう？ ああ、でも、じゃあ……何か遊びたいことか……」

「お気遣いなく。私は護衛見習いとしてここにおります。リュカ様も護衛がいる生活に慣れてください」

「……はい」

母からは遊び相手兼護衛見習いだと聞いていたが、どうやらヴァンは遊び相手を務める気はないらしい。部屋の後方に控え眼光鋭く背筋を伸ばして立つ姿は、見事に護衛騎士だ。

リュカが胸に抱^{いだ}いていた大きな期待は、シオシオと萎んでしまった。ふたりでやろうと思っていたチエスのセットを、こっそりと机の引き出しにしまう。

（なんか思ってたのと違う……。でもまあいいや。これからずっと一緒なんだし、きっと徐々に打ち解けていくはず！）

しかし、それから三ヶ月が経っても、ヴァンの態度が変わることはなかった。

リュカはめげずに彼に好かれようと、あれやこれやと手を尽くした。お茶や遊びに誘うのはもち

ろん、ときには彼のためにお菓子を用意したり、贈り物までしたりした。だがどれもすげなく断られ、ふたりの距離は縮むどころか日に日にヴァンの顔には不機嫌さが増しているような気がする。

（うまくいかないなあ。俺が選ぶものはヴァンの好みに合わないのかもしれない。彼はオオカミだし、もつと活発なことが好きなのかも）

考えあぐねた末、リュカは彼に剣の手合わせをお願いすることにした。

代々騎士であるインセングリム家のヴァンにとって、剣は最も得意なことのはずだ。これならきっと彼も乗り気になってくれるだろうし、花を持たせてやることもできる。

名案だと思いき^{いき}揚々^{きようきよう}と声をかけたリュカに、ヴァンは眉間^{みけん}の皺を一本増やして怪訝^{けつげん}そうな顔をした。レイナルド家は代々魔法使いの血筋で、リュカも錫杖^{しやくじょう}は持っているが剣など一度も握ったことがない。ヴァンが訝^{いぶ}しむのも当然だった。

「そりゃ俺は剣を扱ったことがないけどさ、でも男の子ならやつぱり憧れるんだよ。だから、ね。胸を貸すと思って一回だけ。お願い」

リュカがジッと見つめ必死に懇願すると、ヴァンは唇を突き出しいかにも渋々といった様子で頷^{うなづ}いた。初めて彼が誘いに乗ってくれたことに、リュカは大喜びし顔を綻^{はな}ばせる。

（やった！ やつぱりヴァンは戦ったり体を動かしたりすることが好きなんだ。これからはそういう方向性で攻めよう）

遊びであっても剣を握るなど家の者にバレたら止められるのがわかっていたので、リュカはこっ

そりと騎士の訓練場から訓練用の木刀を借りてきて、人けのない屋敷の裏庭までヴァンを連れていった。

「さあ、やろう。俺じゃきみの相手にはならないかもしれないけど、こう見えて運動神経は悪くない方なんだ。避けるくらいはできるから、遠慮せず打ち込んできてよ」

見様見真似の型で木刀を構え、ヴァンの正面に対峙する。

リュカは正直甘く考えていた。転生前に比べ体が丈夫になったことで抱いてしまった誤った万能感、そして、いくらオオカミ族でも子供ならばそれほど強くはないだろうという油断。

それらが一瞬で打ち碎かれたのは、「それじゃあ、はじめ！」と合図を口にした五秒後だった。

「……え？」

あまりにも刹那の出来事でリュカは何が起きたのかわからなかった。

気がつくのと体が後方にあつたはずの植え込みまで吹っ飛ばされており、どこかに打ちつけたらしい背中と頭がズキズキと痛んでいる。さらに木の枝にでも擦って傷ついたのか、玉のように白い頬からは血が細い筋になって流れていた。

ただ啞然としたまま低木の植え込みの中に埋められていると、顔を青ざめさせたヴァンがこちらへ走ってくるのが見えた。

「大丈夫ですか、リュカ様！」

ヴァンは手を引っ張ってリュカの体を起こすと、「申し訳ございません！」と謝罪の言葉を繰り返

返しながら全身についている泥や葉っぱを払ってくれる。そして今まで見たことのない不安そうな表情を浮かべ、リュカの頬の傷をハンカチで押さえた。

それを見てリュカは申し訳ない気持ちになってきた。

彼の實力を甘く見すぎていた。いや、己の無能さを自覚できていなかったのかもしれない。むしろその両方だ。

インセングリム家の長男だけあってヴァンの戦闘能力は大人並みのものだった。それでも主に向かって本気を出すはずもなく、かなり手加減してくれたはずだ。しかし、リュカの身体能力は彼の想像よりはるかに下回っていた。

オオカミほどではなくともキツネなら反射神経も素早さもそこそこあるはずだし、何より本人が運動神経のよさを自負していたのだからとヴァンは考えて、適切と思われる力で打ち込んできたのだろう。ところが構えた木刀に軽く一撃当てただけで、小柄なリュカはホームランボールのごとく吹っ飛んでしまったのだ。

(……これは俺が悪かったなあ。リュカになってから普通に走れるようになって運動神経がよくなった気がしてたけど、大間違いだったみたい。っていうか、運動神経云々以前に太刀筋すら見えなかったけど)

反省して苦笑いしながら痛む後頭部を押さえる。どうやらコブができてきているようだ。

それを見たヴァンはますます顔を青ざめさせ、深々と頭を下げた。

「申し訳ございません！　どんな罰も厭いといません！」

「ちょ、ちよつと。頭を上げてよ。罰なんか与えないよ、俺が悪かったんだから。きみがこんなに強いなんて思わなかったんだ。だから気にしないで、ね？　今度は俺も練習してから挑むから、また手合わせしてよ」

せつかく彼と仲良くなれそうな機会だったのに、かえって距離ができてしまいそうで怖い。責任を感じてしまっているヴァンの姿を見て、心苦しくなったリュカは必死にフオーする。

「こんな怪我なんともないよ。もちろん母上にも誰にも言わないし、きみも忘れて」

笑みを浮かべたリュカだったが、目に映ったのは今にも爆発しそうな怒りを、歯を食いしばって抑え込んでいるヴァンの顔だった。

「……っ、どうしてお前はそうなんだよ……」

「え？」

険しい形相のヴァンが、震える声で呟つぶやいた。リュカはどうして彼が憤っているのか見当もつかず、ただオロオロとする。

「な、何か怒おこってる？　もしかして俺が弱すぎたから？　ごめんね、ごめん」

次の瞬間、リュカは左頬を思おもいっきりこぶしで殴られていた。再び植え込みの中に尻もちをつき、ただ呆然ぼうぜんとする。

リュカのもとまでやってきたヴァンは今度は優しく手を差し伸べるのではなく、胸むなぐらを掴つかんで

引っ張り上げた。

「家臣に傷つけられて何ヘラヘラしてるんだよ！　お前はレイナルド家の次期当主だろ！　怒おどれよ！　僕を罰しろ！　いつもいつも僕の顔色を窺うかがいやがって、お前に四大公爵家としてのプライドはないのかよ！」

唾つばがかかるほど間近で怒鳴られて、リュカは驚きのあまり固まってしまった。すぐ目の前にある金色の瞳には、弱々しい自分の顔が映っている。

「……ごめん……」

「謝あやまるな!!」

彼の迫力に氣圧けおされ思わず謝罪を口にすれば、逆に一喝されてしまった。どうしていいかわからず啞然あぜんとしていると、ヴァンは突き飛ばすように胸むなぐらから手を離し、身を翻ひして行いってしまった。

「こんな情けないやつが次期当主だなんて、僕の主あるじだなんて……反吐へどが出る！」

残されたリュカは三度目に尻もちをついた植え込みの中で、肩を怒いからせ去いっていく彼の後ろ姿を見ていることしかできなかった。

それから一ヶ月、ヴァンはリュカのもとに姿を現さなかった。

なんでも彼は自分から父親にリュカを傷つけたことを申告し、罰を受けたのだという。しばらく

は謹慎状態だそうだ。

リュカは家の者や侍従らに怪我を心配され大事に扱われたが、頭のコブや殴られた頬よりも、何より胸が痛かった。

怒鳴られたときは動揺するばかりで理解できなかったが、今ならヴァンがなぜあれほど憤っていたのかわかる。きつと彼はずつともどかしくて、腹が立って仕方がなかったのだ。

家臣にへりくだる主が情けなさすぎて。

レイナルド家とインセングリム家は何をどうしたって主従の関係だ。個々の思いはどうあれ、互いの家にとつてそれが有益であり至上の関係だ。本家の嫡子であるヴァンも、騎士としてレイナルド家を守るからこそが最高の荣誉だと幼い頃から教えられてきたのだろう。そしてまだ見ぬ未来の主人のために、剣の鍛錬を重ね腕を磨いてきたに違いない。

だが、その崇高な刃が守るべき主が、こんなみつともない子ギツネだったらどうだろう。

威厳がなく尊敬できるところもなく、四大公爵家としての矜持もなければ気概もない。それどころか家臣の機嫌を窺って媚びを売る有様だ。もし自分がヴァンの立場だったらと考えて、リュカは己を殴りたくてたまらなくなった。

(恥ずかしい……。きつと彼の目には、俺は世界一情けないやつに映ってたんだろうな)

ヴァンの姿を見なくなってから、リュカは猛省の日々を送り、そして不安に陥った。もしこのまま彼が側近をやめてしまったらどうしよう。

そうして、リュカの大きな耳と尻尾が垂れ下がりに続いてからしばらく経った頃、ヴァンが再びリュカの部屋の扉を叩いた。

「長らくおそばを離れることになって申し訳ありませんでした。ヴァン・ド・インセングリム、本日よりリュカ様の護衛任務に戻らせていただきます」

一ヶ月ぶりに姿を見せた彼は、相変わらず子供らしからぬほど厳格で慇懃だった。以前と変わらず背筋はまっすぐ伸びているし、シャツにも揃いのベストと脚衣にも余計な皺ひとつない。

しかし、彼を迎えるリュカは今までは違っていた。

今まで好んで身につけていた生地の子供用のラフなシャツではなく、レイナルド家の者が着用する金色の法衣の子供用を身につけている。

「任務復帰ご苦労様。俺はこれから本を読むから、いつものように警護を頼むね」

シャンとした姿で向き合うリュカに、ヴァンは微かに眉を上げ驚いたように見えたが、すぐ表情を引きしめた。そして胸に手をあて一礼すると、リュカの机の脇に控え静かに立った。

(ヴァンが俺のために立派な騎士になると頑張ってくれてるんだから、俺もヴァンのために立派な当主にならなくちゃ)

それが正解なのか、正直なところリュカにはまだよくわからない。けれど、ヴァンに悔しい思いをさせることはもう嫌だった。

リュカは書斎机の椅子に座り、静かにレイナルド家の歴史と魔法のことを綴った古書を読む。

ちつとも面白くないけれど、ヴァンがいない間に頑張って三分の一まで読み進めたものだ。

今日も難解な文章に苦勞しながら一時間ほど読み続けたリュカは、一度ゆっくりと瞬きをしてから視線を本に向けたまま口を開いた。

「……ヴァン。そのままでもいいから、聞いて欲しい」

返事はなかったけれど、リュカは斜め後ろのヴァンが自分の言葉に耳を傾けてくれているのを感じて話し続けた。

「俺は……友達が欲しかったんだ。次期当主だから仕方ないけど、俺はひとり外に遊びに行くことはできないし、周囲は大人だらけの環境で育った。だからずっと友達が欲しいって願いつけてたんだ。そんなとき、ヴァンが来てくれて本当に嬉しかったよ。初めて友達ができるって浮かれて……けど、そうじゃない。きみはこの家に、俺を護りにきたんだよね。騎士として、次期当主である俺を」

言葉を切ると、時計の秒針の音だけが部屋に響いた。まるでリュカの声を少しも聞き逃すまいとしているみたいに、ヴァンの呼吸音さえ潜められている。

「きみは嫌がるかもしれないけど、やっぱり謝らせて欲しい。……ごめん。今まで情けない主で悪かったって反省してる。これからはヴァンが恥じることがないような、立派な主になるから。だから……」

声が掠れるのを感じて、リュカは慌てて唇を閉ざした。そして感情と共に込み上がってきそうな

涙をグツとこらえてから、再び言葉を紡いだ。

「だから……ヴァンが俺を立派な主だっけっていつか認めてくれたら、そのときは、主従だけど……と、友達になつて欲しい……」

黒目がちな大きな瞳が、濡れてウルウルと潤む。リュカは口をへの字に引き結んで一度大きく鼻を吸ると、「そ、それから」と震える声で言った。

「……俺のところへ戻ってきてくれて、どうもありがとう」

こらえきれず溢れた涙が、ポタ、ポタ、と本のページに落ちる。

リュカは今日、ヴァンが戻ってきてくれたことがたまらなく嬉しかった。父親に言われて渋々戻ってきたとは思わない。部屋に入ってきたときから、抑えきれずに左右に揺れている銀色の尻尾が、彼の心の内を表している。

ヴァンは何も答えなかった。部屋には時計の秒針と、リュカの鼻を吸る音だけが聞こえる。そうしてようやくリュカの涙と鼻水が止まった頃。

「……御託はいいから、次期当主らしくしっかりしてください」

ささやかに、咳くような声が聞こえた。

「うん」

微笑んで頷いたリュカは知らない。斜め後ろに立つ彼の頬が、赤く染まっていたことを。

その年の冬のことだった。

温暖なレイナルド領にしては珍しく、積もるほどの雪が降った。

転生してからリユカは雪を見るのは初めてだ。懐かしさと目新しさが入り混じった気分を高揚し、屋敷の庭へ出て駆け回らずにはいらなかった。

雪だるまや雪鬼を作り雪を堪能していたが、そのうち飽きてきた。本当は雪合戦がしたいのだが、周囲には誰もいない。滅多に雪の降らない地域ゆえレイナルドの屋敷も周辺の町も大雪に対処できる設備がなく、みんなてんやわんやなのだ。侍従や騎士らが揃って雪かきに従事し、ヴァンまで駆り出されている始末である。リユカも手伝いたかったが、さすがに公子にやらせるわけにはいかないらしい。

大人たちは皆忙しく、リユカはせっかくの雪をひとりで楽しむしかなかった。

やがて庭の雪でだるまを作り尽くしたリユカは、まだ跡のついていないまっさらな雪を踏みしめる遊びに移行した。庭から建物に沿って、点々と小さなブーツの跡が続いていく。

屋敷の角まで歩いてきたとき、リユカは思い立ってブーツを脱いだ。素足で雪を踏みしめる感触が面白くて、前世のときから裸足が好きだったリユカは弾むような足取りで進む。フエネックギツネの足裏は熱が伝わりにくいので、雪の上を素足で踏んでも平気だ。

そうして、純白の大地に無駄に足跡をつける遊びも飽きてきた頃、屋敷の裏側まで来てしまったリユカは怪しい人影を見つけた。そこは、厨房の裏手にあるゴミ捨て場だった。

子供と思われる小さな影が、ゴミの山を漁っている。そして食べ物の残骸を見つけては、夢中で口に運んだり懐にしまったりしていた。

「ちょ……っ、何してるの!? 汚いよ!」

あまりに衝撃的な光景に、リユカは気がつくと呼んでいた。その声に驚いた人影は素早く身を翻し、ポケットから出したナイフを両手に構えてこちらを見据えた。

年齢はリユカと同じかやや小さいくらいだろうか。まだ幼さの残る顔はガラが悪く、垂れた目も目つきが悪い。牙の覗く口もとほうつすらと笑みを浮かべているが、好意的なものではなく嘲笑(ちょうしやう)しか見えなかった。

冬だというのに薄手のシャツを捲った腕には黒い斑点が見えており、丸みを帯びた特徴的な耳から、リユカは彼がハイエナ族だとわかった。

(どうしてこんなところにハイエナの子供が?)

レイナルド家の従者や家僕にハイエナ族の者はいない。けれどあまりにみすばらしい彼の身なりを見て、リユカはすぐに理解した。

おそらく彼は領地のスラムに住む子供だ。滅多にない大雪のせいでライフラインが崩れ、食料難に陥ったのだろう。そうして食べ物求めてレイナルド家の敷地まで潜り込んできたのだ。

得体のしれない不法侵入者ではあるが、リユカに彼を捕らえる気はない。空腹の子供を追い詰めてなんになろう。

「つ、捕まえたりしないよ。だからそのナイフおろしてよ、ね？」

リュカは両手を挙げ敵意がないことを示しながら微笑みかける。しかしハイエナの子は警戒心を解かない。黒い瞳でリュカを見つめたまま、尻尾をピンと立てている。

「お腹空いてるんでしょう？ よかったら食べ物を持ってきてあげる。だからゴミなんて食べない方がいいよ」

食べ物と聞いてハイエナの子の耳がピクリと動いた。

「持ってくる！ 待ってて！」

リュカはすかさず背を向けると、そのまま厨房に繋がる裏口へと駆けていった。

幸い、使用人は総出で雪かきにあたっているようで、厨房には誰もいない。ジャガイモの入っていた麻袋にパンや果物、干し肉などを片っ端から詰め込んで背負い、かまどにかけられていた鍋からスープを一杯すくって椀によそった。

「持ってきたよ！ ……あれ？」

スープが零れないように気をつけながら慌てて戻ってくると、そこにハイエナの子はいなかった。逃げてしまったのだろうか？と両手で椀を持ちながらしょんぼりと耳を垂らすと、ゴミの山の陰からひょっこりとハイエナの子が顔を覗かせた。

彼は注意深く辺りを見回し、両手にナイフを握ったままリュカに近づく。そしてリュカの手から椀をひたたくように奪うと、まだ湯気の立つスープを一気に飲み干した。

「ちょ、ちょっと。火傷しちゃうよ」

ハイエナの子は空になった椀を投げ捨て口もとをペロリと舌で舐めると、リュカの背負っていた麻袋を指さした。

「それも食い物か？ 寄越せよ」

「あ、うん。いっぱい持ってきたから食べきれなかった分は持って帰るといいよ」

彼が初めて喋ってくれたことを少し嬉しく思いながら、リュカは麻袋を差し出した。ハイエナの子は中身を漁るとパンを掴んで食べ始め、それを飲み込みきらないうちに今度は果物を貪る。

よつぽどお腹が空いていたんだなあと思いながら、その様子をリュカは少し離れて眺めた。しかし、よくよく考えるとこれはバレたら叱られる案件なのではと不安がよぎる。

ゴミを漁るほど空腹なのが気の毒でつい食べ物を与えてしまったが、一生面倒を見るつもりがないなら餌付けしてはいけないというのは野良猫や野良犬に接するときの鉄則だ。当然リュカには、彼の一生の面倒を見ることなどできない。

そもそもこの子は武器を持った不法侵入者なのだ。本来なら警備の騎士がすっ飛んできて牢に入られるべき人物に無償で食べ物を分けてやっているなど、どうかしている。もしヴァンにでも知れたら、彼は眉間に峡谷のような深い皺を刻むだろう。

リュカは今さらながら困ってしまった。とんでもなく無責任なことをしてしまった気がする。けれど。

「ねえ、これもあげる。足が真つ赤だから履くといいよ」

リュカは脱いでいた自分のブーツを、裸足のハイエナの子に向かって差し出した。見たところ足のサイズは、そう違わなさそうだから履けるだろう。ハイエナの子は一瞬キョトンとした表情を浮かべ、リュカの足とブーツを交互に見つめる。

「あんたは靴を履くのが嫌いなのか？」

「嫌いじゃないけど、フエネックの足の裏は強いんだよ。だから靴がなくても平気」

ブーツを手にとるとハイエナの子はそれをマジマジと眺めてから両足に履いた。サイズを確かめるように軽く飛び跳ね、満足したのか口角を上げる。

「悪くない」

その声はどこか嬉しそうで、リュカも嬉しくなる。

「あと、これも」

首に巻いていたマフラーも渡すと、ハイエナの子は今度は間髪容れずに受け取った。

「今年の冬は寒いから、温かくして。誰にも言わないでいてくれたら、次来たときには毛布をあげるよ。もちろん食料も」

マフラーをグルグルと首に巻き付けていたハイエナの子は、さすがに動きを止めてリュカを訝しそうに見つめる。

「……何を企んでやる？ それとも同情か？ 哀れみか？」

威圧感を増した声に、リュカは慌てて首を横に振った。

「違うよ！ そうじゃなく……その、責任感……かな」

「は？」

不審そうな視線を浴びながら、リュカは肩を竦めて話し出した。

「きみが飢えたり寒い思いをしたりしているのは、きっと俺のせいでもあるんだ。だってこの領地はうちが……レイナルド家が治めているんだから。きみみたいな飢えた子や貧しい人を生み出してしまっている責任は領主にある。俺はまだ子供だから家業には携わってないけど、でもやつぱりすぐく申し訳なく思うよ。だから、俺が当主になったら必ず貧しい子をなくすって約束するから、それまでは……こんなことで我慢してもらってもいいかな」

なんとも浅はかだと自分でも思うが、今のリュカにできることはこれくらいしかない。

領地の貧民への支援は父が適切に行っている。けれど、どうしたってすべての人に不足なく支援を行き届かせることは不可能なのだ。予算や人員の都合もあるし、貧困地区に届いた支援物資を独占する悪辣な大人も多い。その皺寄せは子供のような弱者にいく。

支援の手から零れ落ちた弱い者をすべて救いたいと思うのは、今のリュカには過ぎた望みだ。子供である彼に予算や人を動かす権限はないし、ひとりですべての責任を持てるわけもない。

いつか責任を負える日が来るまで、リュカがやれることはせいぜい自分の物を分け与えることぐらいだ。もちろんそれも、大人に見つかれば叱責を受けるだろう。

「食料はできれば他のお腹を空^すかせてる子たちにも分けてあげて欲しい。日持ちするものを入れたつもりだから」

きちんと巻けずにはどけてきてしまったハイエナの子のマフラーを、リュカは巻き直してあげながら言葉を続けた。

「……あんた、レイナルド家の当主になるのか？」

「え？ あ、うん。一応ね」

「名前は？」

「リュカだよ」

「でかい耳だな」

「はは、よく言われる」

マフラーを巻き終えて引つ込めようとした手を、ハイエナの子は不意に掴んで顔を寄せた。そしてスンスンと匂いを嗅いでからはなす。

「明日も来るから食いもん用意しとけよ。パンと干し肉は必ず入れろ。もし俺を騙して捕まえようとしたら、そのでかい耳を食いちぎってやるからな」

「だ、騙さないよ」

物騒なことを言われ、リュカはブルツと尻尾を震わす。

「約束だ。守れよ、当主サマ」

そう言つてハイエナの子は食料の詰まった麻袋をかつぐと、高い壁をひらりと飛び越えていった。侵入防止のために壁に取り付けてある忍び返しのアIANフエンスも、彼には意味がないようだ。リュカはそれを感じて見届けてから、再び白い雪に足跡を点々とつけて庭へ戻っていった。

翌日、宣言通りハイエナの子は屋敷のゴミ捨て場の前にやってきた。

もし大勢仲間を連れてきて「百人分の食料を寄越せ」と言われたら、準備しきれないので少し困るなど考えていたけれど、彼はひとりやってきて、昨日と同じ分だけの食料と約束した毛布をもらつて帰っていった。

そうして明日もまた来ると宣言し、翌日もその通りにやってくるというのを一週間ほど繰り返した。

彼に会う時間は長くはないが、さすがに一週間も顔を合わせていれば互いのことを少しずつ話すようにもなってきた。

ハイエナの子は、レイナルド家の屋敷から八キロも西にある町の貧困地区からやってきていた。リュカが思った通り、大雪のせいで畑が埋もれ水も凍り業者の馬車も来られず、人々は食料難に陥っているのだという。レイナルド家からの支援も出ているが、なにせ馬車が通れないのだから物資も届かない。三日も食べ物にありつけなかったハイエナの子は限界を感じ、金持ちそうな屋敷にあちこち忍び込んでゴミを漁ったり食料を盗んだりしながら、ここまでやってきたそうだ。

親はいないが、ハイエナ族の仲間と一緒に十人ほどの群れで暮らしていると彼が話したので、それ以降リュカは麻袋に十人分のパンと干し肉とリンゴを詰めるようになった。

箱入り息子のリュカにとつて、ハイエナの子は刺激的な存在だった。

過酷な環境でも逞しく生きる彼はしなやかで、自由でもあり、何より己の心に素直だ。齒に衣着せずものを言うし、物理的な距離も近い。すっかり警戒心を解いたのか、笑うときに肩を組んでくると彼の大胆さを、前世で人との距離感に悩んだことのあるリュカは羨ましく感じていた。

ある日は、昨日開けたばかりだと言つて耳に嵌めた小さなピアスを見せてくれた。この世界でもピアスをしている獣人はたまにいるが、こんな幼い子供がしているのを見たことはない。

「痛くないの？」

お洒落さよりも痛みの方が気になって尋ねたリュカに、ハイエナの子は声をあげて笑う。

「ビビりだな、リュカは。ちっとも痛くねーよ。それにほら、舌には七歳のときから開いてるんだぜ」

そう言つてベーツと出した舌の真ん中らへんには、チタンの小さな珠がのつていた。リュカは前世でも今世でも舌ピアスを実際に見たのは初めてだ。思わず「ひゃっ」と声をあげて、恐る恐る眺めてしまう。

「カッコいいだろ？ これでキスすると気持ちいいんだつてさ。大人が言つてた」

妖艶な笑みを浮かべリュカをからかうように舌なめずりして見せる彼は、とても子供には見えな

い。なんだかドキドキしてしまつて、リュカは赤くなった顔を隠すように俯いた。

「す、すごいね。そういうのつてもっと大きくなつてからするものだと思つてた」

「は？ そんなの時間がもったいねーじゃん。やりたいことは今すぐやるんだよ、大人とか子供とか関係ねえ」

俯いたまま顔を背けようとするリュカを、逃すまいとばかりにハイエナの子が肩を組んでくる。

やっぱ彼の距離感はバグっている。

「きみのそういうとこ、すごいと思う……」

「あんたは次期当主のくせにいちいちビビりだよな」

ますます鼓動を逸らせながら呟いたリュカに、ハイエナの子はおかしそうに大口を開けて笑つた。

「で？ リュカは何年後に当主になるんだよ」

そう尋ねられ、気が早いなあと思いつつも答える。

「父上が引退を宣言するか、亡くなられてからだだよ。年齢は関係ないけど少なくとも俺が成人してからだから、あと十年以上はかかるかな」

「ん？ あんたつて何歳なんだ？」

ハイエナの子が不思議そうに目を丸くする。

「十歳だけど……」

それを聞いた途端、彼は弾かれるように爆笑した。

「マジか！ そんな小さいナリしてるから、てっきり五歳くらいかと思ってたぜ」

実年齢より低く見られることには慣れっこだが五歳はあんまりではないかと思う。それでは幼児だ。

「あんたのこと弟みたいに思ってたけど、俺よりふたつも年上だったんだな。笑える！」

「え!? きみって……つまり八歳ってこと!?」

まさかこんなに遅しくて兄貴然としたハイエナの子が年下だったとは、リュカの方こそ驚きだ。

「これからはお兄ちゃんって呼んでやろうか。可愛い五歳児のお兄ちゃん」

よほどおかしかったのか彼はゲラゲラと笑い続け、しまいには懷にリュカの頭を抱え込むと髪をグシャグシャと撫でながら、からかってきた。

「もう！ 見た目のことは気にしてるんだから言うなよお」

そう訴えながらも、リュカの顔にも満面の笑みが零れる。誰かとこんなふうにあざけ合って触れ合うのは初めてだ。

（もしかしたら俺たちって仲いい？ これって……友達だったりする？）

ふと、そんな考えがよぎって胸が大きく高鳴った。

「あ、あのさ。きみって、俺のこと——」

——俺のこと友達だと思ってくれてる？ うっかりそう尋ねようとしたリュカだったが、すぐ我に返って途中で口を噤んだ。もし「は？ 何言ってるんだ、気持ちわるい」などと顔をしかめられ

てしまったら受けるダメージは計り知れない。そもそも彼の名前だってまだ教えてもらっていないのに。

ハイエナの子は不思議そうに瞬きをすると、不自然に言葉を切ってしまったリュカの顔を覗き込んできた。

「なんか言いかけたろ？ 『俺のこと——』のあとはなんだ？」

「いや、なんでもない」

口に出さなかったリュカの本音を探っているのだろう、彼は瞳をマジマジと見つめてくるが、なにせ顔が近い。鼻先まで触れそうになり、他人とあまり接触したことのないリュカは動揺して首まで赤くなってしまう。

「『俺のこと——』のあとは、『好き?』って聞きたかったのか？」

「え？」

予想外の言葉が続けられて、リュカはキョトンとした。ハイエナの子は視線を絡ませたまま、ご機嫌そうに口角を上げる。

「好きだよ、あんたのことは。貴族や金持ちはいけ好かないけど、リュカは特別だ」

次の瞬間、リュカの鼓動は人生で一番早く脈打った。前世と今世を合わせ二十六年間、友達というものを求め続けてきたが、もしかしたらついに念願が叶ったのかもしれない。いや、特別というのはそれ以上か？

何を言っているのかわからず、茹でたこのような顔で「は、わ、わ」と口をパクパクさせてしまう。

すると、見つめ合っていたハイエナの子が微かに耳を動かし険しい形相で振り返った。ほぼ同時に音を捉えたリュカも、ビクリと体を跳ねさせる。

「隠れて！ 誰か来る！」

大人の足音が近づいてくるのを察知して、リュカはハイエナの子を焼却炉の陰に押しやると、自分足音の方へ近づいていった。

「リュカ様！ ここで何をしたらっしゃるんですか！」

姿を現したのは、教育係のロッサムと数人の侍従だ。イヌ族テリア種のロッサムは筆頭教育係で、普段の躰を一任されているだけでなく、帝王学と作法の教師でもある。普段から厳しく口煩く心が狭いこの初老の男が、リュカははつきり言っている苦手だ。

「リュカ様、最近あなたがコソコソと何かをしたらっしゃることは屋敷の者は皆気づいております。厨房からパンや果物がなくなっていることに、誰も疑問を抱かないとでも？ さあ正直におっしゃってください、いったい食料をどこへやったのですか？ 大人に隠し事をするなど嘆かわしいお父上も悲しまれますよ」

ロッサムはクドクドと早口で捲し立ててくる。リュカが思わず苦々しい表情を浮かべれば、「なんですか、そのお顔は！」とすかさず叱責が飛んだ。

不満げに頬を膨らませたまま何も言わないリュカを見て、ロッサムは眉を吊り上げると、周囲をキョロキョロと見回してから侍従に命じた。

「辺りを調べなさい、ここで誰かと会っていたのかもしれない」

それを聞いてリュカは飛び上がりそうなほど驚くと、声を張り上げた。

「わあああ！ ごめんなさいごめんなさい！ パンは俺が全部食べました！」

「嘘おつしやい、そんな小さな体のどこに何十個ものパンが入るといのですか」

「嘘じゃないよ！ あ！ お腹が痛い！ パンを食べすぎてお腹が痛い！ 運んで！ 今すぐ俺を部屋まで運んで！ 丁寧ね、ほら、全員でそつと運んで！」

あまりにも滅茶苦茶な誤魔化し方だったが、リュカがその場に倒れてお腹を押さえて蹲ると、辺りを調べようとしていた侍従たちが集まってきた。

「こんな見え透いた手には乗りませんよ！」

「あー俺は公子なのに！ 次期当主で大事な跡取りなのに！ お腹が痛くても部屋に運んでももらえない！ 侍従が言うことを聞かないー！」

ロッサムは憤ったが、リュカが大げさに喚くと、侍従たちは困ったように顔を見合わせてから命令に従って全員でそつと体を抱えて運んでいった。

（これはあとで父上とロッサムからダブルでお説教コースだな。しばらくは外に出してもらえないかも）

我ながらお粗末な作戦だと思っただが、ゴミ捨て場から全員を遠ざけることには成功した。きっとハイエナの子ならこの隙にうまく逃げてくれるだろう。

(……あの子に、また会えるかな)

しかし、その願いは虚しくも叶うことはなかった。なぜならリュカの予感通り、その後の一ヶ月は庭へ出ることは禁止され、雪もすっかり溶けてからは周囲に絶えずヴァンや大人がいる生活に戻り、とてもゴミ捨て場へ行けるタイミングなどなかったのだから。

そうしてようやく監視の目も緩んできた半年後。こっそり向かったゴミ捨て場にハイエナの少年が現れることは、もうなかった。

第二章 金と銀の騎士団長は仲が悪い

「リュカ様！ 北西部の交易路にモンスターが出没したとの報告です！ 首都への流通に影響が――」

「リュカ様、南部の農村から陳情団が接見を願ひ出ております。昨年のモンスター襲来の被害が大きく、税を軽減して欲しいと――」

「リュカ様、東部遠征騎士団より救援物資の追加要請が届いております。緊急にご確認を――」

「はいはい、ちよつと待つてちよつと待つて！」

四方八方から飛んでくる侍従たちの報告に耳を傾けながら、リュカは机の上の書類に片っ端からサインする。そして二本の指で眉間みけんを押さえ三秒ほど考えると、左から時計回りに侍従を指さして口を開いた。

「北西部に第十五師団を派兵、到着まで商隊に被害が出ないよう半径五キロは交易路を封鎖、首都の物価が高騰しないよう屋敷の倉庫を適切に開放して。陳情団の接見は侍従長が代理を。財務官と相談して減税の提案を書面で報告して。東部遠征騎士団つてこないだも物資送らなかつたっけ？ は？ どさくさに紛れて純金製の鎧とか要望書に書いてあるんだけど、これ誰か横領してない？

すぐに調べて！」

キビキビと出された指示を受けて侍従らが部屋を出ていくと、入れ替わりに別の侍従がやってきて、新たな書類の束をリュカの机にどっさりと置く。

「先月のモンスターによる被害報告です。緊急性の高い順にまとめておりますのでお目通しを」

永遠に終わりの見えない仕事の山にリュカは眩暈めまいを覚えると、椅子から勢いよく立ち上がり天に向かって叫んだ。

「もう限界だ！ 勇者だ、勇者を召喚しろー!!」

子供の頃のリュカは思っていた。この世界はゲーム『トップオブビースト』の舞台だけど、モブである自分には関係ないと。たとえ魔王が出現したとて、ゲームに顔も出ない自分にはさほど影響もないだろうと、安穩あんげんと構えていた。

ところが、そんな考えが幻想だと打ち砕かれたのは、彼が十五歳のときだった。

ゲームの通り魔王が出現したまではよかった。しかし、魔王率いるモンスターは実に迷惑な存在で、世界中のあちこちで暴れ回っては被害をもたらししている。もちろんそれは、レイナルド家の領地も例外ではない。

穏やかだった毎日は一変、当主である父グレゴールはモンスターの討伐やらその後始末やらに多忙を極めることになる。公子であるリュカも未熟ながら父を手伝わざるを得ず、領地の半分の管理

を任され、否が応でも次期当主としての経験値を上げていくこととなった。

リュカの受難はさらに続く。それから四年後、リュカが成人を目の前にした十九歳のとき、父が急逝したのだ。

これにはリュカは驚愕した。ゲームにおいて勇者召喚の儀をおこなったレイナルド家の当主は、紛れもなくグレゴールだったのだから。

ゲームと違う展開になった衝撃はもちろん、「モブだから」という安心感が打ち砕かれ、さらには勇者召喚という重責を負うことになったリュカの心境は察するに余りある。

だが無情にも時は止まってくれない。リュカは悲嘆に暮れる間もなく二十歳になると同時にレイナルド家の正式な当主となり、毎日山のように届くモンスター関連の問題解決業務に忙殺されることとなったのだ。

そんなわけで、今日も今日とてリュカは朝から目の回るような忙しさに追われていた。

時計の針が正午からだいぶ過ぎた頃、ようやく一日の中で一番忙しい波を越えたリュカは、ぐったりとした体を執務室の椅子に預けながら遅い昼食にありつく。モンスターは夜行性のものが多く夜に問題が発生するため、緊急性の高い被害報告は朝に集中するのだ。

とりあえず急を要する案件は片づき、利那の安堵あんどを覚えたリュカは、緊張感からの解放と昼食後の満腹感から大きな欠伸あくびをひとつ零した。

すると、後ろからコツンと頭を叩かれて呆れたような声を浴びせられた。

「大欠伸なんかするな、みつともない。それにまだ書類の確認は半分も終わってないんだぞ」
下唇を突き出し拗ねた表情で振り返れば、そこにはいつものように眉間に皺を刻んだヴァンがいた。

「欠伸くらい許してよ。ゆうべだつて南の村のモンスター襲来の対応に追われて二時間しか眠れなかったんだ。俺、かなり頑張つてと思うけど？」

「甘えるな」

上目遣いで訴えてくるリュカに、ヴァンは厳しく言い放つけれど、それが本気の叱責でないことはわかつている。リュカは書類だらけの机にうつ伏せると、腕の隙間からチラリと横目でヴァンを見て口角を上げた。

「それに大欠伸なんかするのはヴァンの前だけだつて。他に人がいるときはもつとちゃんとするよ」

「そういう気持ちの緩みが、いつか身を滅ぼすんだからな」

ヴァンは容赦ないお説教を浴びせながらも、部屋の隅にあつたブランケットを取ってリュカの肩にかける。

「十五分経ったら殴つても起こすぞ」

そして手近な椅子に座り、束の間の睡眠をとるリュカを見守った。

ヴァンはリュカの成人に合わせて正式な護衛騎士となつた。正確にはレイナルド家当主第一護衛騎士団『黄金麦穂団』団長だ。

団の名前は、古くはオオカミが穀物神だつたことに由来する。オオカミが黄金の麦を護るという伝説が転じて、黄金色の毛を持つキツネを護る騎士団に名づけられたのだそう。

代々レイナルド家当主の第一護衛騎士団である黄金麦穂団に入ることは、オオカミ族にとって何より名誉なことであり、ましてや騎士団長ともなれば、インセングリム家直系にしか与えられない榮譽職だ。インセングリム家嫡子の長男であり剣の腕も申し分なく、リュカとは旧知の仲であるヴァンの就任は妥当である。

十歳のときから側仕えだつたヴァンは、今やリュカの右腕同然だ。護衛騎士としてはもちろん、執務の補助や生活面の面倒を見ることも多々ある。

幼かったあの日に彼に殴られて以来、リュカは次期当主としての自覚に目覚め邁進してきた。公子としての気品を習得し、人の上に立つための帝王学を学び、つらい魔法の実地訓練も乗り越えた。座学はもちろん、領主として将来受け継ぐ地のことは隅から隅まで学んだ。

そんな努力の甲斐あつて、十二歳になる頃には随分と次期当主らしく振る舞えるようになってきたといえるだろう。もつとも、幼い外見と厳格になりきれない性格のせいで威厳だけはどうしても醸せないけれど。

その頃だつた。リュカが常々言っていた「公の場以外では『リュカ』って呼んで欲しいし、気軽

に喋って欲しい」というお願いを、ヴァンが受け入れてくれるようになったのは。

はつきりと確認したわけではないが、リユカはヴァンを友達だと思っている。主従ではあるが、十年も一緒にいる彼は最大の理解者だ。ときに笑い合うこともあれば、兄のように叱責したり励ましたりしてくれることもある。流行り病で寝込んだときにずっとベッドに寄り添ってくれていたのも、魔法の習得に連続で失敗し泣いていたときに黙ってそばにいてくれたのもヴァンだ。

リユカは彼に家族より深い絆を感じている。これはもう友達どころか親友かもしれない。

そしてヴァンも、相変わらず厳格でやや怒りっぽい性格ながらもリユカを誰より大切に扱っているのは、傍目にも明らかだった。周囲の人々はヴァンのことを、忠誠心の高い騎士であり、リユカのおき友でもあり、まるで兄弟のようでもあると評していた。

「おい、十五分経ったぞ。起きろ」

大きな手が背を揺する感触で目を覚ましたリユカは、先ほどよりさらに大きな欠伸を零しながら体を起こす。

「ああ、よく寝た。頭がスッキリしたよ」

そう言いながら椅子から立ち上がり大きく伸びをしていると、何かに気づいたヴァンが腰を屈めて顔を覗き込んできた。

「……何？」

「馬鹿だな、書類の上で寝ただろう。頬にインクが付いてしまってる」

ヴァンはリユカの顔を片手で押さえると、ハンカチを取り出してクッキリと文字が転写した頬を軽くこすった。

まるで母と幼子のようなやりとりだが、リユカは近い距離にあるヴァンの顔を直視できず、さりげなく視線を横にずらした。頭が熱くなっている、自分の頬が赤く染まっているのを感じる。

(……ヴァンは本当に綺麗な顔をしているよな。近づかれると男同士なのになんか照れちゃう……) 出会った頃から品のある綺麗な顔立ちだとは思っていたけれど、成長した今ではヴァンは美青年という言葉がしっくりくる容姿になっていた。尻尾の色と同じ銀色の髪はサラサラで絹糸みたいだし、男らしくもほっそりした輪郭に涼やかな目もとと薄い唇は、まさに“グールビューティー”だ。匂い立つような気品溢れる姿はいかにも育ちのいい貴族の令息という感じで、リユカは常々彼と並ぶと「どっちが名門貴族の公子かわからないな」と密かに思っている。

しかし優雅ともいえる見目は、彼が剣を握れば一変する。敵を見据える金色の瞳は戦闘本能の炎を燃やし、獲物を狩るオオカミさながらの野性味を感じさせた。

麗さとワイルドさを持ち合わせた魅力は顔立ちだけに留まらない。ヴァンは着痩せして見えるせいで線が細い印象を受けるが、服を脱げばその肉体には鋼のような筋肉を纏っている。鍛えても筋肉のつきにくい体質のリユカは、彼の盛り上がった胸筋や六つに割れた腹筋が羨ましくてたまらない。しかもヴァンは高身長で、小柄なりユカとは四十二センチもの身長差があるのだ。一日だけでもいいから彼の体と代わりたいたいと何度願ったことだろうか。

（もし俺が女の子だったら絶対にヴァンを好きになっちゃってただろうな。こんな綺麗で強くてカッコいい騎士が毎日そばにいたら、誰だって恋しちゃうつて）

そんなことを考えながらチラチラとヴァンの顔を見ていたら、ふと視線が合ってしまった。なんとなく焦る^{あせ}気持ちが湧いてきて、顔がますます赤くなってしまふ。

すると、ヴァンは唇を一瞬噛みしめ不快そうに眉根^{まゆね}を寄せると、リュカの顔からパツと手を離して背を伸ばした。

「落ちない。水で顔を洗ってこい」

「あ、うん。ありがとう」

彼の言葉におとなしく従ったリュカは洗面所まで行き、鏡で自分の顔を見つめる。拭いてもらったおかげで少し薄くなっているが、左頬^{ひだりほほ}に『治水工事の進行』の反転した文字がくつついた顔はなんと間抜けだ。

「はは、カッコ悪……。俺ってなんかしまらないよなあ」

桶の水でジャブジャブと洗った顔を再び鏡に映しながら、リュカは軽く溜息をつく。

十年間一緒に育ってきたヴァンはあんなに立派な青年に成長したというのに、自分は相変わらず「永遠の少年」のままだ。黒目がちな大きな瞳のあどけない顔立ちも、百三十九センチで止まってしまった身長も、とても成人には見えない。

フェネックという種に生まれてきてしまったのだから、これはもうあきらめるしかないのだけれ

ど、それでも時々、男らしさとか威厳とかとは程遠い自分が悲しくなる。

「幼いにしてもせめてこう、凛々しい造形だったらな。髭^{ひげ}でも生やしてみようかな」

鏡を見つめながらリュカは指で眉^{まゆ}を吊り上げてみたり、顎^{あご}を撫でさすってみたりした。そして散々顔を弄り回してみたあと、なかなか戻ってこないリュカを心配して洗面所までやってきたヴァンに、襟首を掴まれて部屋へ戻っていったのだった。

それから数日後、リュカは四大公爵家の当主合議に参加していた。

この合議は魔王が出没してから、四大公爵家が連携しモンスター討伐などを話し合うため、定期的に開催されている。

会場はそれぞれの屋敷の持ち回り制で、今回はヴェリシエレン家だ。距離的に各公爵家の屋敷は馬車で二ヶ月以上かかるほど離れているが、各家の敷地にはワープゲートがあり四大公爵家を結んでいるので移動は難しくない。

今日の合議では、ついに勇者召喚の話題に及んだ。

「――それでは、来たる次の新月の夜。勇者召喚の儀を行う」

二時間に渡る話し合いの末、ライオン族ワレンガ家の当主デボイヤが重大事項に相応しい重々しい声で決定を告げた。他の当主らも引きしまった表情で、しっかりと頷^{うなず}く。いよいよ勇者という未知の存在を呼び出すことに、誰しもが高揚と緊張を抱いていた。